
一過

オオツカマイカ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一過

【Nコード】

N6403E

【作者名】

オオツカマイカ

【あらすじ】

突然の夕立ち。夕立ちが気付かせてくれるもの。それを私はいつ消化できるのだろうか…。

休日の午後。

熱気で溢れる街なかに、夕立ちがやってきた。

気がつけば上空に黒ずんだ雲。

そんなことにやっと気づいた矢先、

水分を含んだ大気の中に、滑りこむように水滴が降る。

やがてその水滴は質量を増し、視界に残像が残るほどの強い雨になる。

雨は、地面を覆うコンクリートに打ちつける。

バチバチ。

バチバチ。

連続した雨はそうして耳につく雨になる。

私はすっかり雨に占領された空を、網戸越しに眺めていた。

気づくと網戸を開けて、

ベランダに居た。

ベランダから見下ろした道路。

平らに舗装されたコンクリートは、

雨に打たれ続ける。

打たれた雨は跳ね返る。

跳ね返る。

跳ね返る。

そのあとは。

きつとコンクリートの上に舞い戻る。

「離れられないんだよなあ……」

どんなに望みがない付き合いだとわかっていても、

次の約束があれば、「まだ大丈夫」と思えてしまふ安易な恋愛。

もうやめようって思うのにな。

気持ちは何度も何度も彼から離れようとして、

何度も何度も彼に舞い戻る。

好きだけど、離れなきゃ。

離れなきゃいけないのに、好き。

嫌いになれないから離れられない。

堂々めぐりの想いを、雨の午後に重ねて、私はしっとり雨に濡れて。

特に急ぐこともなく、部屋の中に戻った。

ヒタヒタと床を歩き、タオルで髪を拭く。

そしてしばらく音量の小さいTVの画面を眺めたりして。

どれくらい経っただろうか。

ふと外に気をやると、すっかり雨の音が消えていた。

早くも雲ひとつない空になっている。

いつか。

こんな雨あがりのように、彼を忘れることがあるのだろうか。

まるで、彼にぶつかっては悩んでいた自分などなかったように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6403e/>

一過

2011年1月27日13時17分発行